

國學院大學學術情報リポジトリ

The projection of Ryunosuke Akutagawa in
<Toshishun> : The image of Ryunosuke
Akutagawa viewed from Toshishun

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 邵, 若農 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001641

『杜子春』における芥川龍之介の投影

—— 杜子春に見る芥川像

The projection of Ryunosuke Akutagawa in <Toshishun>

— The image of Ryunosuke Akutagawa viewed from Toshishun

邵 若 晨

キーワード：杜子春 書簡 芥川像

Key words: Toshishun Akutagawa letter the statue of Akutagawa

要旨

『杜子春』は、大正九年六月に書かれ、同年七月の『赤い鳥』という児童文芸誌に掲載された童話である。この作品の原典は、中国の唐代伝奇『杜子春伝』であり、芥川龍之介の歴史小説と児童文学の代表作とも言える。

本稿は、テキスト論と作者論を合わせ、実証的研究法で『芥川龍之介全集』に収録された芥川の書簡を史料として利用し、作者が『杜子春』を書くまでの経歴をまとめてみる。その上で、テキストの登場人物である杜子春に見る芥川像を考察する。具体的に、まず、芥川龍之介が『杜子春』を書くまでの人生における「三つのショック」と「一つの幸せ」をまとめてみる。次に、テキストに戻り、杜子春の母に対する態度、杜子春の三回「落ちる」経歴とぼんやり、最後の「人間らしい、正直な暮らし」という選択、三つの方向から、杜子春の人物像と芥川の間像との間に合致するところを考察する。

Abstract

<Toshishun> whose original is the Chinese Tang Dynasty's Legend <Du Zi-chun zhuan>, is a fairy tale written in June 1923 and published in a children's literature magazine called <Akai tori> in July of the same year. This work can be seen as the masterpiece of Ryunosuke Akutagawa's in both historical novel and children's literature.

With the combination of text theory and auteur theory, this paper adopts empirical research method, and uses the Akutagawa letter recorded in <Ryunosuke Akutagawa Complete works> as historical evidences, which aims to pursue author's life path before the creation of Toshishun. According to this, this paper tries to seek the reflection of the image of Akutagawa from character of Toshishun. To be specific, on one hand, this paper summarizes "three shocks" and "one happiness" in Ryunosuke Akutagawa's life before writing <Toshishun>. On the other hand, back to the text, this paper is going to consider the circumstance where the character that conforms to the statue of Akutagawa from three aspects: the attitude on of Toshishun toward

her mother; Toshishun's three broken experiences; and the final choice of "living a normal and ordinary life as human".

一、問題提起

『杜子春』は、大正九年六月に書かれ、同年七月の『赤い鳥』という児童文芸誌に掲載された童話である。中国の唐代伝奇『杜子春伝』を原典として再創作した作品で、芥川龍之介の歴史小説と児童文学の代表作とも言える。今までの芥川研究者はその作品に対する評価が少なくない。例えば、関口安義氏は、『杜子春』は『蜘蛛の糸』『白』と並んで、これまで広く読まれ、龍之介童話のベストスリーの一つに数えて良いものである⁽¹⁾というように、芥川童話としての『杜子春』を評価した。この作品は中国古典の翻案小説であるため、日本だけでなく、中国でもよく知られている。翻案小説であるため、原作と異なった再創作した部分は作者本人の考えが含まれている。この作品の「再創作程度」について、芥川自身が昭和二年2月3日河西信三宛の書簡で次のように述べた。「拙作『杜子春』は唐の小説杜子春伝の主人公を用ひをり候へども、話は2/3以上創作に有之候⁽²⁾。「2/3以上創作」という比率からわかるように、『杜子春』は再創作程度が高い作品である。原作と異なった部分と加えた部分、しかもわざと保留した部分は、作者本人の工夫が含まれ、注目すべきだと考える。例えば、芥川の『杜子春』には、「母」という登場人物を加入する一方、改編しやすい杜子春の「三回落ちる経験」を保留している。それらの原作に対する取捨選択により、この作品は人間としての本質により近づき、本当の自我、生活の内実を探するというテーマの物語になった。芥川がこの作品を書くまでの経歴をまとめたくて、このような改編は作者本人の経歴と思想ときわめて強い関連性があると気づいた。

今までの研究において、芥川とその作品の関連性についての研究は少なくない。例えば、篠崎美生子氏は、「芥川作品系列の中より理解するならば、「杜子春」に見られる母親は、「西方の人」の〈マリア〉をその典型とする。(中略)母親の〈無償の愛〉に示唆されて地上に回帰する「杜子春」にも、知識や理知、観念や

(1) 関口安義、「II作品の世界 4 杜子春」、『芥川龍之介と児童文学』、久山社、2000年。

(2) 『芥川龍之介全集』第11巻、岩波書店、1978年版、p.497。

自意識で塗り固められた芥川の、自己嫌悪を伴った自己に対する批評、及んで日本の近代人に対する、ほろにがく、絶望的な批評といった。」⁽³⁾ というように、母の愛に示唆され、仙人になることを断る杜子春という人物を通し、芥川本人の「自己嫌悪」、「日本の近代人に対する絶望的な批評」等、人間そのもの、作者自分の人生、更に当時の日本社会に対する批判が見られるということを指摘した。吉田精一氏は、「童話なるが故に、平凡な人情、世間的な道徳に結末を求めてゐる。しかしそこに倫理的な龍之介の性格が窺はれるのである。」⁽⁴⁾ というように、童話として読まれたこの作品において、主人公杜子春が最後に選んだ「人間らしい、正直な暮らし」という結末には、作者芥川の性格が含まれるということを指摘した。中国の沈韻氏は、「芥川児童文学には、芥川自身の創傷が反映されていると言える」⁽⁵⁾ というように、児童文学作品としての『杜子春』と芥川本人との関係を指摘した。

以上の先行研究を踏まえ、芥川本人と『杜子春』という作品との間に、一定的な関連性があるということがわかる。今までの研究において、「登場人物の杜子春と作者芥川との関係性」という視点で考察する論文の数が少なくない。しかし、多くの論述は芥川の年譜しか参照していなかった。そのうえで、原文における杜子春の出来事と芥川の経歴との類似性を指摘した。本稿のオリジナリティとして、テキスト論と作者論を合わせ、特に、実証的研究法で芥川の手簡を参考資料として利用し、作者が『杜子春』を書く前の実態を窺える。その上で、作中の登場人物杜子春の出来事とこの作品を書く前の芥川の経歴を比較しながら、杜子春に見る芥川像を考察してみようと思う。

便宜のため、筆者は『芥川龍之介全集』に収録された芥川が友達らとの手簡と年譜⁽⁶⁾を参考しながら、『杜子春』を書くまでの芥川の人生からいくつかの節目を取り上げ、『杜子春』を書く前の芥川龍之介の経歴(主な事件)という表を作った。その上で、杜子春における芥川の投影を考察していきたいと思う。

(3) 篠崎美生子。「母」を殺す言葉のために：「杜子春」から「母の発達」へ。『惠泉女学園大学紀要』。(18)。

(4) 吉田精一。『芥川龍之介の芸術と生涯』。河出書房、1951年。

(5) 沈韻。「芥川龍之介の児童文学研究——『蜘蛛の糸』、『杜子春』と『河童』を中心に」。南京工業大学、2016年。

(6) 注：文章の中で引用した手簡と年譜は『芥川龍之介全集』(岩波書店1978年版)第十巻と第十一巻による。

二、『杜子春』を書くまでの芥川——三つのショックと一つの幸せ

表 1

西暦	日付	歳	出来事
1892年	3月1日	0	新原敏三(当時42)とフク(当時32)の長男として誕生。
1892年	10月25日	0	母フクが発狂した。そのため、龍之介は母の実家、本所小泉町一五番地の芥川家で養育されることになった。
1898年	4月	6	江東尋常小学校に入学。
1902年	11月28日	10	実母フクが衰弱のために新原家で死去(享年42)。
1904年	3月9日	12	新原家で親族会議がなされ、龍之介を新原家の家督相続人から排除し、芥川フユを敏三の後妻とする相談をした。
1904年	5月	12	龍之介が推定家家督相続人排除の判決を受ける。 正式に芥川家と養子縁組を結び、養嗣子となった。
1905年	4月	13	東京府立第三中学校に入学。
1910年	10月	18	第一高等学校一部乙類(文科)に入学。
1913年	9月	21	東京帝国大学文科大学英吉利文学科に入学。
1914年	7月	22	この頃、吉田弥生への恋心が芽生え始める。 *井川恭宛の書簡:「僕の心には時々恋が芽生える」と書き送り、久米や山宮と共に弥生の家を訪れていたという。
1915年	2月28日	23	弥生との結婚を家族に反対され、断念する。 *井川宛書簡:「僕は求婚しやうと思つた。家のものにその話を持ち出した。そして烈しい反対をうけた。伯母が夜通し泣いた、僕も夜通し泣いた」
1915年	11月1日	23	塚本文子への恋情を感じ始める。 *山本宛書簡:「正直な所時々文子女史の事を考へる」
1915年	11月	23	『帝国文学』に「羅生門」を発表。 漱石の木曜会に出席し、門下生となる。
1915年	12月13日	23	塚本文子と結婚相手としてはっきりと意識する。 *山本宛書簡に「僕自身僕の行為(この場合は結婚)に責任をもつやうに文ちゃん自身もその行為に責任をもち得る程意志を自覚してほしい」とある。
1916年	2月/4月	24	第四次『新思潮』を創刊し、「鼻」を発表。/漱石より「鼻」を激賞する手紙を貰い、大いに自信を得る。
1916年	8月	24	文子との結婚が正式に両家の間で約束される。 *23日付井川宛書簡:「文子は愈貴ふ事になつた」
1916年	8月	24	東京帝国大学文科大学英吉利文学科を卒業。成績は20人中2番。1番は豊田実。
1917年	5月	25	処女短編集『羅生門』刊行。
1919年	2月	27	文子と結婚。
1919年	3月	27	海軍機関学校の教職を辞し、大阪毎日新聞社に入社。

西暦	日付	歳	出来事
1920年	3月	28	長男芥川比呂志が誕生。 * 28日付恒藤宛書簡：「赤ん坊が出来ると人間は妙に腰が据るね 赤ん坊の出来ない内は一人前の人間じゃないね。」
1920年	6月	28	『杜子春』を脱稿

表1は時間順にまとめた芥川が『杜子春』を書くまでの経歴である。この表で引用した書簡とまとめた出来事からわかるように、芥川が『杜子春』を書くまでの人生において、四つの大きな節目がある。以下で「三つのショック」と「一つの幸せ」という二つのキーワードでまとめ、詳しく説明してみる。

(一) 三つのショック

芥川龍之介は「大正時代の終焉」と評価され、世界でよく知られている作家である。しかし、彼の人生は順風満帆ではなく、「山あり谷あり」な一生とも言える。前記の表により、『杜子春』を書くまでの芥川の人生において、三つの大きな「谷」があり、言い換えれば、三つのショックがあったということがわかる。

一つ目のショックは彼の母の発狂と死であると考えられる。芥川龍之介は1892年3月に生まれ、生まれてから八ヶ月目、母のフクが発狂した。1902年11月28日、母が衰弱のせいで、生家の新原家で死去した。そのことは十歳の子供にとって如何なるショックを与えたということは推測できる。母から受け取った影響は母を失った苦痛に限らず、「狂人の子ども」ということは彼に一生的な「ほんやりした不安」を与えた。芥川は自伝的要素を持った作品『点鬼簿』の冒頭で、「僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない」⁽⁷⁾ というように、母の実態を率直に述べた。その話を通し、作者の芥川が発狂した母から感じられなかった愛情に対する渴望が読み取られる。その後、「僕の母の死んだのは僕の十一の秋である。それは病の為よりも衰弱の為に死んだのであろう。その死の前後の記憶だけは割り合にはっきりと残っている。」⁽⁸⁾ というように、母が死んだ時間と原因を述べた。下線部を通し、母の死が子供の芥川に与えた影響の深さが感じられる。

(7) 『芥川龍之介全集』第8巻、岩波書店、1978年版、p.180。

(8) 同上。

二つ目のショックは「捨て子」の生活である。表1でまとめたように、母の発狂のせいで、まだ一歳未満の芥川は母の実家、本所小泉町一五番地の芥川家で養育されることになった。その時から、芥川は「居候三杯目にはそっと出し」のような生活を始めた。それだけでなく、1904年、つまり母に死なれた一年半の後、母の生家新原家で親族会議がなされ、十二歳だった龍之介は生家の家督相続人排除という判決を受け、正式に芥川家と養子縁組を結んだ。芥川家に引き取られた龍之介は、ある意味で徹底的に「他人の子供」になってしまった。このような捨てられた経験と「捨て子」の生活は、母の発狂と母の死亡の上で、再び芥川の子ども時代に暗い影を投げかけ、二つ目のショックを与えたと考えている。

三つ目のショックは初恋の失敗である。芥川は1913年に東京帝国大学に入学した。1914年前後、青山女学院で英語を専攻した吉田弥生に恋愛感情を持ってきた。そのことについて、表1で引用した井川恭宛の書簡から見られる。芥川は1914年7月の井川恭宛の書簡で、「僕の心には時々恋が芽生える」というように、自分が吉田弥生に対する愛情を井川に伝えた。資料を調べてみれば、芥川と吉田の関係がわかるようになった。そもそも芥川の実家、新原家は吉田家と家族ぐるみで付き合いがあるため、芥川と吉田弥生の関係は「幼馴染」とも言える。彼が1914年に吉田弥生に宛てた手紙の中で、「寝る前に時々東京のことや弥ちゃんのことを思ひ出します」というように書かれ、彼女に自分の親しい感情を表していた。しかし、二人は結局結婚まで行けなく、破局を迎えた。前述のように、母の発狂のせいで、まだ一歳未満の芥川は母の実家、芥川家で養育されることになった。彼と吉田弥生の恋愛は意外に芥川家の養父母に反対された。それにもかかわらず、二人の恋愛関係が芥川家に反対された同時に、吉田家は相手の弥生に縁談を行かせた。このように、二人は両側の家族に分けられた。この幼馴染の恋愛関係が反対された理由として、資料をまとめてみれば、次の話がある。弥生が芥川家と折り合いが悪くなった、龍之介の実家新原家と仲が良かった吉田家の娘である。しかし、養父母の意見により、弥生の実家吉田家は士族でないこと（芥川家は江戸城御数寄屋坊主に勤仕した由緒ある家系）で、芥川家より身分の面で劣っていた。しかも、したがって、龍之介は正式に芥川家に引き取られた子供として、吉田家の娘と結婚することが無理であった。恋愛関係をやめることは養父母の意思に満足したが、芥川は理解できず、このことから人間のエゴイズムしか感じられなく、大きなショックを受けた。自分と弥生の恋愛関係が反対されたこ

とについて、彼は1915年2月に井川宛の書簡でこのように書いた。

「ある女を昔から知つてゐた その女がある男と約婚をした。僕はその時になつてはじめて僕がその女を愛してゐることを知つた。(中略)僕は求婚しようと思つた。家のものにその話を持ち出した。そして烈しい反対をうけた。伯母が夜通し泣いた、僕も夜通し泣いた。」

更に、初恋の失敗で感じられたこと、考えられたことについて、彼が3月9日の山本宛の書簡、次のように述べた。

「如何にイゴイズムを離れた愛があるかどうか。イゴイズムのある愛には、人と人との障壁を渡ることはできない。人の上に落ちてくる生存苦の寂寞を癒すことはできない。イゴイズムのない愛がないとすれば、人の一生ほど苦しいものはない。周囲は醜い。自己も醜い。そしてそれを目の当たりに見て生きるのは苦しい。しかも人はそのままに生きることを強られる。一切を神の仕業とすれば、神の仕業は憎むべき嘲弄だ。(中略)短い時の間にまぎへと私の心に刻まれてしまひました。」

この書簡を通し、弥生との恋愛関係が養父母に「合理的な理由」で反対されたことは当時の芥川に大きなショックを与えたということが確認できる。自分の愛が周囲の猛反対によって潰され、家族の大人たちに勝手に翻弄されたことによって苦悶に陥いながら、世に絶望した芥川の様子が窺える。しかも、エゴイズム(書簡には「イゴイズム」と書く)のない純粋な自分の思いや望みが全うされる愛を心底で渴望している感情も読み取られる。

もし前述の母の死去と捨て子の生活は病気や衰弱など人為で控えられないことにより、子供の芥川を傷つけたとせば、初恋の失敗は養父母と芥川家の面子によって与えられた破局だと考えられる。このような「人為的な破局」は芥川に人間のエゴイズムに直面させられ、前より猛烈なショックになったと想像できる。

以上で、筆者が作った「『杜子春』を書く前の芥川龍之介の経歴(主な事件)」という表と芥川が書かれた自伝的小説『点鬼簿』、友達らとの書簡を合わせて利用し、芥川が『杜子春』を書くまでの人生において、ショックになった三つの事件を取り上げた。これらの資料と事件に対する分析を通し、母の発狂と死、「捨て子」の生活、初恋の失敗という三つのことは、『杜子春』を書く前の芥川に次第に猛烈になったショックを与えたと認められる。

(二) 一つの幸せ

前述のように、芥川の人生において「谷」の一方で、「山」もある。

周知のように、彼は1915年に『帝国文学』で「羅生門」を発表し、同年11月から、夏目漱石の木曜会に出席し、漱石の門下生となる。この学術の道は順調であったとも言え、人生の「山」の一表現であると考えられる。しかし、ここで「一つの幸せ」だと考えることは、順風満帆の学術の道ではなく、やはり恋愛関係と家族観の復活——塚本文子と結婚することと長男芥川比呂志の生まれたことであると考える。

初恋が失敗した後の1915年8月、芥川は塚本文と恋愛し始めた。このことは芥川が塚本文に送った恋文で確認できる。

「僕は時々文ちゃんのことを思い出します。文ちゃんをもらいたいということ、僕が兄さんに話してから何年になるでしょう。もらいたい理由はたった一つあるきりです。そうしてその理由は僕は文ちゃんが好きだということです。もちろん昔から好きでした。今でも好きです。そのほかに何も理由はありません。」

しかも、芥川が塚本文と恋愛関係を更に発展し、結婚まで行きたいということは、山本宛の書簡で確認できる。1915年11月の山本宛の書簡で、芥川は「正直な所時々文子女史の事を考へる」と書き、友達に自分が塚本文に対する感情を伝えた。同年12月の山本宛の書簡には、芥川は以下のように書いた。

「僕自身僕の行為（この場合は結婚）に責任をもつやうに文ちゃん自身もその行為に責任をもち得る程意志を自覚してほしい。」

このように、芥川はこの書簡を借り、自分と塚本文二人とも責任感を持っている愛情に対する渴望、さらに二人の恋愛関係を結婚まで行きたい意思を友達の山本に伝えた。年表からわかるように、その後の1919年、芥川と塚本文は前のように大人のエゴイズムに翻弄されることなく、17歳の塚本文と田園調布の自宅で結婚式を挙げた。

結婚した後の1920年3月、長男芥川比呂志が生まれた。息子の生まれにより、芥川の人生と身分は大きく変化した。彼は1920年3月恒藤宛の書簡で、以下のように書いた。

「赤ん坊が出来ると人間は妙に腰が据るね 赤ん坊の出来ない内は一人前の人間ぢゃないね」

この書簡から読み取られるように、息子の誕生は芥川に身分的の変化を与えたに限らず、人間のエゴイズムを味わった暗い人生に、新しく「人間感」を注いだと考えられる。この書簡を通し、結婚することと息子の誕生したことにより、芥川は前述の「初恋の失敗」した後の苦しんだ気持ちから救われて脱出し、落ち着いた心境を持ってきて、平凡な日常生活を送っていると考えられる。そのため、恋愛関係と家族観の復活——塚本文子と結婚することと長男芥川比呂志の生まれたことは、芥川が『杜子春』を書くまでの人生において、「一つの幸せ」であると考えられる。

三、杜子春に見る芥川像

杜子春は小説の主人公として、最も重要な登場人物であり、原作の『杜子春伝』と比べて大きな区別がある人物である。芥川が再創作した杜子春の経験したこと、追求したこと、しかも最後の選択等は、原作の『杜子春伝』と大きく変わった。この人物像の設定には、芥川自身の感情と思想が含まれていると思う。

主人公の杜子春と作者本人との間に如何なる関連性があるかを考察するために、前にまとめた芥川の経歴を踏まえ、作中の杜子春の出来事と作者の芥川本人の生い立ちに合致する部分を考察しようと思う。具体的には、杜子春の母に対する態度、杜子春の三回「落ちる」経歴とぼんやり、最後の「人間らしい、正直な暮らし」という選択、この三つの方向から分析してみる。それを通し、杜子春という人物に見る芥川像を考察していきたいと思う。

(一) 杜子春の母に対する態度

前にまとめた芥川の人生における「三つのショック」から見れば、少なくとも二つのショックは母親と関係があると考えられる。この点で、母は芥川の人生に深い影響を与えた人である。しかし、母の発狂のせいで、一歳未満に母の実家芥川家で養育されてきた芥川にとって、母は親子の親切感があるが、疎遠な存在でもある。このような矛盾した感情は作中の杜子春が母に対する態度にも含まれている。そのため、この部分はまず『杜子春』の中の「母」という登場人物に着目し、特に杜子春が母に対する態度を通し、芥川本人の投影を窺ってみようと思う。

「母」は芥川の後期の作品の中でよく出る登場人物である。芥川が書かれた「母親像」の出発点について、三好行雄氏次のように述べた。「大正九年にいたって、芥川龍之介はようやく〈母〉を直接の主題とした短編を書き始める。」⁽⁹⁾「大正九年」はちょうど『杜子春』の書かれた年である。その点から見れば、『杜子春』は芥川文学において、「母親」に関する創作の初登場であると考えられる。

「母」というのは芥川龍之介の作品において独特性のあるテーマである。芥川後期の作品の中で、「母」に関する文章がいくつか見られる。注目すべきことは、『杜子春』の後で書かれた「母」という主題に触れた作品は、基本的に著しく自伝的要素を持っている。例として挙げられるのは『点鬼簿』と『大導師信輔の半生』である。『点鬼簿』の中で、冒頭の部分から以下のように述べた。

「僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。(中略) こう云う僕は僕の母に全然面倒を見て貰ったことはない。なんでも一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行ったら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覚えている。」

この簡潔な叙述を通し、母の状態が窺え、しかも、作者が母の愛情に対する渴望も読み取られる。このような独白で、孤独な子供の苦しい生活を述べているというような感じがする。しかも、『大導師信輔の半生』の中に、主人公の信輔について、次のような話がある。

「信輔は全然母の乳を吸ったことのない少年だった。元來体の弱かった母は一粒種の彼を産んだ後さえ、一滴の乳も与えなかった。のみならず乳母を養うことも貧しい彼の家の生計には出来ない相談の一つだった。」

このように、芥川本人と同じような「母の不在」という状況を描き出し、子供の立場から母の愛に対する渴望と母の不在に対する不満を表した。

芥川における母親描写の出発点ともみられる『杜子春』は、自伝的要素を持っている作品ではないが、「母」という登場人物は物語の中できわめて重要な役割を果たしていると考えられる。それにもかかわらず、「母」という人物は原典の『杜子春伝』にはなかった登場人物であり、その人物の設置には芥川本人の考えが含まれていると思う。平野晶子氏の指摘したように、「古典に材を取る以上、この

(9) 三好行雄. 「宿命のかたち－芥川龍之介における〈母〉－」. 『現代作家・作品論』, 1970年。

ような決定的な差異にこそ、作者の執筆意図が宿ると考えてよいだろう⁽¹⁰⁾。そのため、杜子春に見る芥川像を考察するには、そのような原作と「差異」した部分を分析することは不可欠だと考える。

「母」の登場は文章の後半にある。杜子春は森羅殿で様々な苦しい刑罰を受けても、鉄冠子と約束した通り、一言も口を利かなかった。そのような杜子春は閻魔大王を怒らせた。閻魔大王は畜生道に落ちて、痩せ馬になってしまった杜子春の両親を呼んできて、杜子春の目の前でこの二つの馬を打ちのめした。原文において、以下のような描きがある。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見えて、「この男の父母、畜生道に落ちている筈だから、早速ここへ引き立てて来い」と、一匹の鬼に言いつけました。

(中略) なぜかといえばそれは二匹とも、形は見すばらしい瘦やせ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

それは「母」の初登場である。閻魔大王は畜生になった父母を虐待することで、杜子春の「破戒」を誘導しようと思った。しかし、原文により、打ちのめされた両親の前に、杜子春の最初の対処は理性的であった。

杜子春はこう嚇されても、やはり返答をしずにいました。

(中略) 杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思い出しながら、緊く眼をつぶっていました。

この二ヶ所の描写からわかるように、この場面までに、杜子春は苦しんでいる両親に向かいながら、まだ理性を保っている。原文において、杜子春は破戒しないように、「緊く眼をつぶっていました」という動作がある。それは鉄冠子との約束を破らない設定に限らず、芥川の母の不在に対する不満が含まれると思う。この不満は前述の芥川の人生におけるショックを通して推測できる。生まれから母の発狂のせいで、普通の子供の生活を体験したことがなかった芥川は、心の底に母に対する感情が複雑で、その中で必ずしも批難と不満があると考えられる。母の発狂と母の不在は子供の芥川に暗い影を与えた。そのため、小説の中で、苦しんでいる両親に向かいながら、かえって必死に目をつぶった杜子春は、子供芥川

(10) 平野晶子、「杜子春の選択「人間らしい、正直な暮し」とは何か」、『学苑』近代文化研究書紀要、(911) (一)～(九)、2016年6月。

の反発であると考えられる。ここの動作描写は実に、母の発狂のせいで、大きなショックを受けて苦しんでいた芥川の内心を反映していると考ええる。

もし杜子春はこのような理性を保っているながら、畜生になった父母を虐待することで杜子春の「破戒」を誘導しようと思った閻魔大王は失策し、杜子春も鉄冠子との約束を守ることができる。しかし、その後は大きな逆転が出てきた。原文において、次のように杜子春の心理活動と動作を描いた。

「するとその時彼の耳には、殆声とはいえない位、かすかな声が伝わって来ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰っても、言いたくないことは黙って御出で」

それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあきました。」

ここで注目すべきことは二つがある。一つ目は、その「殆声とはいえない位、かすかな」声である。森羅殿で虐待されている畜生は杜子春の父と母である。つまり、この場面において、その声は父から出してもかまわない。しかし、芥川は物語を創作した時、その決定的な役割がある「声」を母に与えた。その設定には芥川本人の考えが含まれていると考える。芥川作品を読んでも、父をテーマとした文章が母より極めて少ないということがわかる。それは、生まれてから母の愛を感じたことが少ない一方、母の発狂と死去で大きなショックを受けた芥川にとって、母の愛と母からの世話に対する渴望はほかの何の感情よりも激しいと推測できる。原文には、「かすかな」という言葉で母の声を修飾した。「かすか」は物の形や音を形容する言葉で、「勢いがなくて、弱々しいさま」という意味である。その形容にも芥川の心の中に隠れた母に対する渴望が読み取られる。もし自分が母から愛されれば、その愛と感心が極めて小さくても、芥川にとって一種の慰めと贖いであろうと思う。言わば溺れる者が必死に掴んだ藁の存在である。そのため、「声」に関する描きは、その発出人も「かすかな」という修飾詞とも、芥川の母の愛に対する渴望を表していると考えられる。

二つ目の注意すべきところは、その声を聞いた後の杜子春の心理活動と行為の変化である。その声を聞いた後、杜子春は思わず眼を開き、「お母さん」と叫んだという描きがある。それはそもそも瞬間的な画面であるが、芥川は百字以上の段

落で杜子春の心理活動と行為の変化を描いた。

「それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあきました。そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じっと眼をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやって、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色けしきさえも見せないのです。大金持になれば御世辞を言い、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何という有難い志でしょう。何という健気な決心でしょう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん」と一声を叫びました。」

特に注意すべきところは、杜子春が最初の時点で「それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあきました。」と、最後の部分にある「杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん」と一声を叫びました。」という前と逆転的な動作の描きである。「懐かしい」、「思わず」という言葉から、芥川が母の愛に対する渴望が見られる。母からの「懐かしい声」により、この前に様々な苦難に遭っても約束を守った杜子春は、「思わず」に破戒した。この設定を通し、作者の芥川にとって、母は全てのことよりも大切な存在であると読み取られる。この場面の最後に、杜子春は「転ぶように」「はらはらと涙を落とす」というように、「お母さん」と叫んだ。個々の動作描写は、二つのレベルの意味が含まれる。その直観的な意味は、原作の中の杜子春が、その前に打たれた両親に無視する態度に対する悔いを表している。その深層にある意味を掘り出してみれば、この作品を書いた時期の成年芥川本人は、自分が持っている母に対する不満の感情に対して、心の底にある悔いと偲びという複雑な感情を表していると考ええる。

(二) 杜子春の三回「落ちる」の経歴と「ほんやり」

文章は洛陽の西の門で進路を考えている杜子春の描写から始まった。杜子春が三回貧乏になった経験は、意外に出典の『杜子春伝』と同じように保留した部分である。前文に引用したように、芥川本人は「拙作『杜子春』は唐の小説杜子春伝の主人公を用ひをり候へども、話は2/3以上創作に有之候」と『杜子春』が翻案

小説としての再創作程度を述べた。しかも、魯迅が芥川の『鼻』を翻訳した後、次のように芥川が書かれた古事の翻案を指摘した。

「彼の作品が使った主題は、主に希望が達したあとの不安、或いは不安を感じている時の気持ちだ。また、彼は常に古い物語を取材し、その物語の翻訳のようなものを書いている。しかし、彼が古事を書くのは、好奇心のためだけではなく、彼自身のより深い理由を持っている：彼は古事に含まれている古人の生活から、自分の気持ちに合致する人物や事を見つけて出したい。そのため、古い物語は彼の改編を通し、新しい生命を持った。しかも、現代人との関連も持った。」⁽¹¹⁾

杜子春の三回の没落という部分は変わりなく、「2/3以上創作」した話に保存されたことは、魯迅の指摘したように、「自分の気持ちに合致する人物や事を見つけて出した」からのではないだろうかと推測している。杜子春の三回「落ちる」経歴にもかかわらず、落ちたたびに三度も出てきた「ほんやり」という言葉にも注目した。「ほんやり」という言葉は芥川人生において重要なキーワードであり、芥川の自伝的要素を持っている作品の中にも何度も出てきた。そのため、杜子春の「ほんやり」は実は芥川自身の感覚を表しているのではないかと推測している。

そのため、この部分で杜子春の三回「落ちる」経歴と「ほんやり」という言葉が出た場面を分析し、登場人物の杜子春と芥川自身との間にある関連性を考察してみようと思う。

文章の中「ほんやり」という言葉は三回も出てきた。原文から抽出すれば、以下の三ヶ所である。

「唐の都洛陽の西の門の下に、ほんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。」

「そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行って、ほんやり空を眺めながら、途方に暮れて立っていました。」

「勿論彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそほそと霞を破っている三日月の光を眺めながら、ほんやり佇んでいたのです。」

三回の「ほんやり」した場面を見てみると、杜子春が「ほんやり」と感じた時間が同じように、三回ともお金持ちから貧乏人になった後のことだということがわ

(11) 原文は中国語。引用は筆者の拙訳による。

かる。しかし、文章の分析から、杜子春の「ぼんやり」した理由は貧乏になった事に限らないということが推測できる。特に、三回目の没落の後、杜子春は鉄冠子のお金の援助を断り、「人間は皆薄情です」という話があった。これは、彼が「ぼんやり」と思っている理由だと考える。

前文のまとめからわかるように、芥川が『杜子春』を書くまでの人生において、母の発狂と死去、「捨て子」の生活、初恋の失敗という三つのショックがあった。それらのショック、特に母の発狂と死去ということは、芥川に極めて大きな「ぼんやりした不安」を与えたと推測できる。この「ぼんやり」は自分の精神状態が母と同じようになる恐れでもあり、一歳未満に芥川家で養育された帰属感の欠如でもあり、養父母など家族の大人たちに勝手に自分の初恋を翻弄されたことで人間性に対する不信でもある。周知のように、芥川は睡眠薬を飲んで自殺した。彼の作品で「ぼんやり」という言葉が出てきたのは、『羅生門』、『ある阿呆の一生』、『或旧友へ送る手記』等が挙げられる。その中に、最も芥川の本音を表したのは遺書『或旧友へ送る手記』だと思う。彼は『或旧友へ送る手記』の中で、「少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である」というように、自分の「ぼんやりした不安」を表した。

このように、「ぼんやり」という言葉は芥川人生において一つのキーワードであるということが認められる。その点から見れば、杜子春が落ちた度に感じた「ぼんやり」は、その作中の登場人物の感覚にもかかわらず、作者の芥川本人が人生のショックを受けた後の本音でもある。

登場人物の杜子春と芥川の経歴を合わせて見れば、芥川が『杜子春』を書くまでの人生にある三つのショックは、杜子春の三回落ちる経歴と数字的に合致したということが見られる。その合致は偶然ではなく、前述の鲁迅の指摘したように、「自分の気持ちに合致する人物や事を見つけて出した」ということにより、芥川本人の経歴を込めて、わざと残された内容だと考える。しかも、文章の中で三回も出てきた「ぼんやり」という言葉も、芥川実際の考えを表していると思う。要するに、三回の没落した後で「ぼんやりした不安」と思ったのは登場人物の杜子春ではなく、「三つのショック」を受けた後の芥川の投影であると考えられる。

(三)「人間らしい、正直な暮らし」という選択

物語の最後で、杜子春は仙人になれず、「人間らしい、正直に暮らし」といった

生活を選んだ。その選択について、多くの研究者が考察した。例えば、正宗白鳥氏により、「こういう程度の人間らしさに、作者は人間を見たつもりで、また自分を見たつもりで安んじていたのであるか」と、その選択と作者本人との間に関係があると指摘した。「人間らしい、正直な暮らし」という選択と芥川の間にある関連性を探求するために、この部分で前文にまとめた芥川が『杜子春』を書く前の人生において、「一つの幸せ」という時期と合わせて考察してみようと思う。

原文には、杜子春が仙人になれなくなり、世間に戻った後で、鉄冠子と次のような話がある。

「(前略)ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな。」

「何になっても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです。」

杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が響っていました。

この部分を前文と合わせて読めば、このように解説できる。杜子春は三回もお金持ちから貧乏人になり、生活が苦しくなると同時に、「世間の人たち」から変わった態度を感じた。それにもかかわらず、鉄冠子の弟子になって、進んで仙人になるために、彼はさまざまな苦勞をして、最後は「南柯の夢」のように、何一つ得ることがなく、現実に戻ってしまった。その時、鉄冠子からの「ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」という質問に対し、「人間らしい、正直な暮らし」と答え、仙人になること、お金持ちになることを断り、これからの平凡な生活を選んだ。ここの「今までにない晴れ晴れした調子」は、主人公の杜子春は極致的な繁栄と苦難を経験した後、人間のエゴイズムと母の愛を感じた後の軽快と釈然であると考えられる。

杜子春の選択と釈然は芥川がこの作品を書いた時の選択と考へでもあると思う。前文にまとめた芥川の経歴から見れば、杜子春を書く前に、芥川の生活は珍しく平静な状態に入ったということがわかる。本文で使ったキーワードで言えば、「一つの幸せ」の時期である。その「幸せ」は、長男が生まれた後に芥川が恒藤宛の書簡で書かれた「赤ん坊が出来ると人間は妙に腰が据るね」という話から見られる。その書簡の内容を通し、その時期の芥川の落ち着いた気持ちと、目の前にあるささやかな幸福を把握したいという気持ちが読み取られる。『杜子春』という児童文学の脱稿は、その書簡の直後の事である。

そのため、杜子春最後の「人間らしい、正直な暮らし」という選択は、杜子春という登場人物の選択にもかかわらず、その作品を創作した時、目の前の平静的

な生活に向かっている芥川の「人生選択」でもあると考えられる。このような選択をした後の「今までにない晴れ晴れした調子」という杜子春の感覚は、母の発狂と死去と捨て子の生活を送ったことで不安感を抱き、初恋の失敗により人間のエゴイズムを直面する芥川が、目の前の「一つの幸せ」という時期で感じられた安心と釈然でもあると考えられる。

四、結び

本稿は杜子春における芥川の投影を考察するために、二つの部分に分けて論述をした。まずは『芥川龍之介全集』に収録された芥川が友達らとの書簡などの史料を参考しながら、『杜子春』を書くまでの芥川の人生における大きな事件を時間順にまとめた。そのうえで、「三つのショック」と「一つの幸せ」という二つのキーワードで、前のまとめから四つの節目を取り上げた。

以上のまとめを参考とし、次の部分で芥川本人とテキストの登場人物——杜子春との間の関連性を考察してみた。その部分で、杜子春の母に対する態度、杜子春の三回「落ちる」経歴とぼんやり、最後の「人間らしい、正直な暮らし」という選択、三つの方向に分けて考察した。具体的に言えば、杜子春の母に対する態度から、芥川の母に対する不満、母の愛に対する渴望、しかも芥川本人が自分の「母に対する不満」という感情に向かい、心の底にある悔いと偲び等、複雑な感情を表している。杜子春の三回「落ちる」経歴と「ぼんやり」という感覚は、『杜子春』を書くまでの人生において「三つのショック」を受けた後、ぼんやりした不安と感じた芥川を反映している。最後の「人間らしい、正直な暮らし」という選択は、芥川本人が『杜子春』を創作した時、目の前の「一つの幸せ」という生活に向かい、ささやかな幸福を把握したいという人生選択を反映している。

要するに、以上の三つの方向から分析すれば、杜子春の人物像が芥川の間人像に合致するところが見られる。結論として、杜子春という人物像は実に芥川の投影であると考えられる。

五、今後の課題

時間や資料に限りがあるため、論述が不十分なところがある。文学作品は生活

に基づき創作することは、一般的に知られている。そのため、芥川が自分の経歴を作品に投影するのは、『杜子春』という作品だけではないということが推測できる。その中から、同じような人物を抽出し、縦方向で比較しながら考察してみれば、何か新しい結論が出てくるかもしれない。

例えば、芥川作品において「母」に関する内容がいくつか見られる。本研究で考察した『杜子春』で書かれた「母に対する態度」の部分には、ただ主人公の心理描写と動作変化から、芥川本人が母に対する矛盾した感情を表している。芥川はそのあとの作品、例えば、『点鬼簿』『大導師信輔の半生』の中で、直接「母は狂人だった」「全然母の乳を吸ったことのない」というように、自分の人生経歴を作品で描き出した。その点から見れば、芥川が作品を通して自分の経歴を表す傾向は増幅していくということがわかる。

そのため、今後の課題として、芥川の経歴と彼のほかの作品との関連性を縦方向で比較しながら研究していきたいと思う。

参考文献

- 関口安義、「Ⅱ作品の世界 4 杜子春」、『芥川龍之介と児童文学』、久山社、2000年
篠崎美生子、「『母』を殺す言葉のために：『杜子春』から『母の発達』へ」、『惠泉女学園大学紀要』(18)、2006年
吉田精一、『芥川龍之介の芸術と生涯』、河出書房、1951年
沈韻、「芥川龍之介の児童文学研究——『蜘蛛の糸』、『杜子春』と『河童』を中心に」、南京工業大学、2016年
三好行雄、「宿命のかたち - 芥川龍之介における〈母〉-」、『現代作家・作品論』、1970年
平野晶子、「杜子春の選択「人間らしい、正直な暮し」とは何か」、『学苑』、近代文化研究書紀要(911)(一)～(九)、2016年6月
正宗白鳥、「芥川氏の文学を評す」、『中央公論』、1927年10月
西原千博、「『杜子春』試解」、『語学文学』(52)、2013年12月
周芷冰、「芥川龍之介『杜子春』論：中国古典からの童話『杜子春』」、『日本文芸研究』(68)、2017年3月